# 子どもたちが楽しい！ と思う居場所を

**大宮駅から北西へひと駅行った日進駅近くに、さいたま市立つばさ小学校はあります。**
**全校生徒が1,000人を超える、さいたま市内で3番目に若い、開校14年目の小学校です。**
**気持ちのよい風が通り、やわらかな日差しの感じられる3階の図書室をたずねました。**

## さいたま市立 つばさ小学校
## 学校図書館司書 林 智子（はやし ともこ）さん

### 子どもたちに図書室の存在を知ってもらう

「新学期には全学年にオリエンテーションをしますが、入学後すぐの1年生にも図書室の使い方を理解しやすいように作ったのが、ミニチュア図書館です」と見せてくれたのは、数々の豆本が詰まった本棚と、貸し出しカウンターの模型。(写真①) 本を借りるときのルールが低学年にもわかりやすく紹介されており、豆本の背には本の住所（請求記号）が記されています。

「図書室に本物の本があることを説明すると、みな夢中でその本を探します。そこでその本の存在を知り、『借りてみよう』につながるんです」

図書室のなかを見渡すと、図書のわかりやすい分類表や、図書室がいかに楽しいかが書かれた子どもたちの俳句、おすすめの本のポスター、選書のためのクイズなど、図書室を身近に感じてもらうための工夫が随所に凝らしてあります。

蔵書は1万4000冊。子どもたちの目線に合った高さの本棚がぐるりと配置されています。最初に目に入ったのは「1・2年生にもおすすめの本 えほんからよみものへ！」という表示。「絵本から読みものへの橋渡しができたら」と、絵本の本棚の上に「低学年でも読める短めのものがたり」がまとまって選書してありました。(写真②)

①図書室の使い方を紹介する模型。本棚には林さんお手製の豆本が並ぶ。表紙のレイアウトは本物そっくり

### 休み時間の図書室は子どもたちで大にぎわい

休み時間になると、図書室へ次々に子どもがやってきます。「コロナ禍で学年ごとの利用日を決めています。今日は3年生の貸し出し日です」。林さんの座るカウンターの前に子どもたちが長い列を作っていき、林さんと楽しそうにやりとりをしています。「図書室にくるとなにか楽しいことがある！ と思ってくれているのか、ただお話をしにくる子もいます」

整然と並んでいた本は、休み時間が終わると、一気に雑然とした様子になりました。「本棚を整理しても、子どもたちが見たあとはいつもこうです。子どもたちが本をさわっている証拠なんですけど」と林さん。「つばさ小学校では“子どもの読書離れ”は感じません。子どもたちは本がとても好きですよ」(写真③)

### ブックスランチで絵本を紹介

図書室の入口に「今月のブックスランチ」という棚があります。(写真④) 「毎月、給食を作る栄養士さんと話し合いながら、その絵本に関連する給食メニューを考えてもらいます。アレルギーのある子もいれば、コロナ禍のこともあり、メニューに制約はありますが、栄養士さんが協力的なので、いろいろ提案させてもらっています」

10月のブックスランチの絵本に選んだのは『ちいさなたいこ』。老夫婦がカボチャのなかをのぞいて楽しむ内容から、パンプキンシチューと、さといもとカボチャのカレーのメニューが決まりました。

「図書室の役割として、いろいろな本があるということを知ってもらいたい。そして出会わせたい。まだまだやりたいことがたくさんあります」

### 授業のサポート、喜んでします！

1・2年生は、各クラス週に1コマ。3〜6年生は各学年週3コマずつ、図書の授業時間が確保されています。図書室でブックトークをすることもあれば、子どもたちが自由に本を選んでいるかたわらにそっと寄り添って、選書のアドバイスをすることもあるそう。“どうして司書になったのですか?”という子どもたちからの質問も頻繁で、この日の午後も4年生からのインタビューの予定が入っていました。「先生とは違った立場の大人のはなしを、子どもたちは真剣に、そして楽しんで聞いてくれるようです」

子どもたちとやりとりできる小学校の図書室が楽しくてたまらないという林さん。

「読書推進や情報提供という役割を担うほか、児童が楽しく学習活動を行えるよう、ワークショップ等の企画も考えます。子どもたちに伝えたいことがたくさんあって。先日も3年生と6年生の国語の授業で、ファンタジーやシリーズのあるものがたりについて授業をしてほしいというオファーが先生からあったので、梨木香歩さんの“岸辺のヤービ”や、富安陽子さんの“菜の子先生シリーズ”、リンドグレーンの作品等を紹介しました」

「低学年はこまめに読書記録をつけ、“多読賞”をめざす児童も多いです。何かと忙しい高学年には、冊数を競うのではなく、一番のお気に入り作品や、作家を見つけてほしいと思います」と林さん。「子どもの方をつねに向いていたいと思います。本と子どもたちをつなげたいんです」と熱く語る林さんに、今後の夢はありますか? と質問したところ「作家さんや研究者の方が、今の職業に就いたのは、小学校の図書室で出会った本がきっかけだったというお話をされていることがありますよね。この図書室でも、そんなすてきな運命の出会いがあったら幸せです」とのこと。

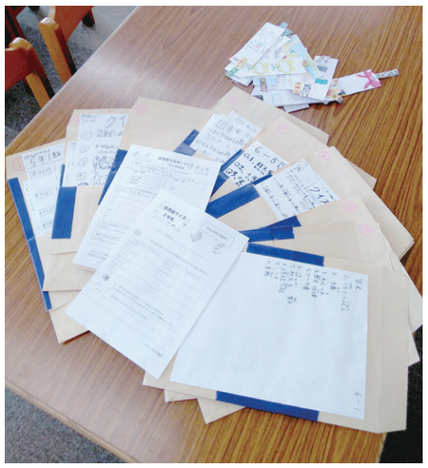
今後も林さんの理想の学校図書室作りは続いていくようです。(写真⑤⑥)

②下2段は絵本が並ぶ。その上に小学校低学年へ読んでもらいたい読みものを配置

③子どもたちが図書室に来たあと、がたがたになった本棚

④簡単なあらすじと絵本を図書室入口付近の棚で紹介

⑤今年もできた“読書の木”。自分たちが読んだ本を葉っぱに書き込んではりつけていく。3週間ほどで立派な木に成長


⑥子どもたちが作った図書館クイズ。正解した人には、図書委員の手作りのしおりをプレゼント

# 図書館を育てる

**茨城県牛久市では、図書館をつなぐ物流ネットワークが構築され、**
**市内の小中学校すべてに学校司書が配置されています。**
**学校図書館に勤めて18年、中根小学校に着任してから2年目を迎えられた**
**関口朱実さんにお話をうかがいました。**

## 牛久市立中根小学校
## 学校司書 関口朱実（せきぐち あけみ）さん

### 手に取りたくなる、読みたくなる工夫

木材できれいに内装された校舎を抜け、増築された別棟に入るとすぐに図書館があります。1,200人近い児童数からするとやや小ぶりかもしれませんが、すっきりと視界が開け、整えられた居心地の良い空間が広がっています。関口さんが着任されてからまず手をつけたことのひとつが、棚の位置と高さの調整です。図書館の真ん中にあった背の高い棚を低くし、極力死角が生じないように書棚の配置を整えました。（写真①②）

もうひとつ、工夫をこらしているのが子どもたちの目線の高さを考慮した本の配置です。（写真③）壁際の背の高い棚の上段は、低学年の子どもたちには手が届きません。分類番号900番台の書籍は、下の段から絵本、幼年童話、高学年向け読み物と、対象学年が上がるにつれて棚の位置が高くなるようにしています。また、子どもたちに関心をもってもらえるよう、できるだけ本の表紙を見せて並べています。

低学年の図書の時間に活躍するのが「テーマ読書」の棚です。1、2年生用それぞれに、1～2か月ごとにテーマを決めて本を用意しています。図書の時間には、そのなかから読み聞かせをしたり、児童たちは読む本を選んだりします。

この時のテーマは、関口さんが考えた「おはなしかるた」の本。子どもたちがひとしきり作品を楽しんだあとは、物語の内容に即した、関口さんお手製の読み札を読み上げて本のかるたとりをするそうです。お話の内容をちゃんと知っていないと取れないかるた、ここにも工夫がありました。

授業中に興味をもったら借りて帰れるようにと、おはなしかるたの本は貸し出しカウンターの近くに専用の棚を設置し、少しずつ複本を増やしています。（写真④）

①棚を低くして見通しのきく状態に

②床には棚の配置換えの痕跡が残る

### 子どもたちにロングセラーを手渡したい！

関口さんはとくにロングセラー作品の紹介に力を入れていると言います。「自分が子どものころに読んで楽しかった本や、わが子と楽しんだ本、また、司書として子どもたちと楽しんできた本、そして読んだときの楽しい気持ちを、今の子どもたちにも伝えたい」という思いが根底にあるそうです。

長年読み継がれてきたロングセラーは、普遍性のある作品が多く、今の子どもたちにとっても大事なテーマであることは変わりません。実際、関口さん自身も何十回と読んだ本でも、読み聞かせのたびに「ああこの本好き！」という実感があり、また子どもたちの反応からも本の力が感じられると言います。

③子どもたちの目線を意識した本の配置

④「テーマ読書」の複本の棚

⑤「本のくじ」。借りる本がなかなか決められない子には、このくじが活躍

⑥岩波少年文庫は、表紙を見せて丁寧に紹介

「ロングセラーに出会う場が他にはない子も多いので、学校図書館がそのための場所でありたいと思います。誰でも、存在を知らないものを欲しがることはできません。子どもは、知っているものに惹かれるので、なじみのあるキャラクターやアニメ風のイラストの本に手を伸ばします。そこで私は、ロングセラーの情報をたくさん提供して、ロングセラーを子どもたちの知っているもの、なじみのあるものにしてしまおうという作戦を実行しています」（写真⑤⑥）

作戦の成果か、中根小学校に来てから2年という短い間にも、子どもたちが手に取る本が少しずつ変わってきているのを感じています。一朝一夕に大きな変化が見えるものではありませんが、ロングセラーをそろえながら、手ごたえをたぐり寄せていきます。「興味がないように見える子も、まだその子の感性にぴったり合う本と出会えていないだけなのかも」という言葉に、関口さんの熱い思いが感じられました。

### 一歩一歩、前へ

毎月1回、司書会議が開かれる牛久市ですが、規模や設備の充実度、蔵書の特色など学校によって異なる部分も多いそうです。司書の努力はもちろん、学校ごとに図書館をどのように位置づけていくか、大きな枠組みから考えていくことが欠かせません。授業で図書館をどのように使うか、どのような資料を集めるか、先生方とどのように連携していくか……。長年、市内のいくつかの学校で司書を続けてこられた関口さんの目には、たくさんの課題やその先の展望が見えているようです。一冊一冊、必要な本をそろえながら、中根小学校の図書館も一歩一歩、前進を続けています。

⑦2022年度に買ってよかった本、第1位は「いきものづくし ものづくし」シリーズ！